『全唐詩逸』出版・渡清と日本在村文人

―在村文化にみる東アジア文化交流―

杉　仁

Ⅰ．市川寛斎『全唐詩逸』の渡清―近世アジアの文化事件―

〈1〉『全唐詩逸』の渡清と清国文人界の評価

近世、長崎から清国へわたり評判になった書は十指をこえる。とくに、中国で失われながら日本だけにのこる詩・文を集成したものが、貴重視された。『全唐詩逸』三冊（文化元年一八〇四刊）も、「海商」を通じて渡清すると、清国文人界で高く評価され、筆写本もつくられた。『知不足齋叢書』（全二四〇冊）におさめられ、復刻本でさらにひろまった。

著者は、日本上州南牧谷下仁田出身の市河寛斎（河世寧。寛延二年一七四九～文政三年一八二〇）。地元では、『関東諸家人名録』が「学者　寛斎（名世寧字子静）　下仁田後江戸　市河小左衛門」と記す。

『全唐詩逸』は、日本だけに遺る唐詩を探索し「百余篇」を収めたもの。康熙帝の命による大集成『全唐詩』（九百巻、四万八千九百余首）の欠をおぎなうものとして珍重された。

その間の事情と評価は、鮑廷博『知不足齋叢書』第二三六冊『全唐詩逸』復刻本「翁廣平跋」がくわしい（原漢文。道光三年一八二三文政六年）。

全唐詩逸三冊、日本國河世寧の輯するところ、余之を海商舶中に得て、以て鮑渌飲先生に贈る。…余惟ふに日本は中華を去る僅に三十六更なり。その国朝文命の敷を被るを得るもの久し。故にその人皆著述に耽ける。余の所見に就けば、山井神鼎の七経孟子考文。其師物茂卿の補遺の如き。茂卿の自著に辨名二巻論語徴十巻あり。林羅山に補群書治要三巻あり。天瀑山人に校刊佚存叢書五集ありて頗る淵博にして考拠あり。其詩集には則ち熊版（坂）邦と其子熊版（坂）秀との南遊稠載録戊亥遊囊。西川湖の蓬高詩集みな斐然として観るべき所あり。茲に又此三冊を得。則ち日本の文学、固より海外他邦の並ぶべき所に非るなり。それ全唐詩多きこと数萬篇に至る。…群書を博観し、方に某人の某篇某句は捜羅未だ盡さゞるものたるを知り、乃ち摘録して之を纂成す。此れ豈易事ならんや。然るときは則ち河世寧の好学深思従ひて知るべし。…

道光三年癸未立夏後十日　呉江　翁廣平海琛氏　跋

翁廣平は、寛斎が数万篇におよぶ『全唐詩』と照合しながら日本の「群書を博観」して「捜羅未だ盡さゞる」逸詩を摘録しつづけた営為を、「豈易事ならんや」とし、「河世寧の好学深思従ひて知るべし」と高く評価した。中国文人界にとって、九百巻四万八千九百余首に網羅されたはずの全唐詩に、自分たちでは如何様にも知れ得ない逸詩が、百二十五首も東僻の日本からもたらされたのである。これは一大文化事件だったにちがいない。

注意すべき第一は、『全唐詩逸』が「海商舶中」からもたらされたことである。近世日中の文化交流に、長崎の「海商」あるいは「清客」つまり清国商家文人の役割が大きかったことをしめす。第二、『全唐詩逸』を高く評価した清国文人界が、すでに日本文人界を「その国朝文命の敷を被る」がゆえに「人皆著述に耽ける」とみていたことである。第三、その証として、日本文人の著述について「山井神鼎…茂卿…林羅山…」らを挙げながら、天瀑山人（『全唐詩逸』にもかかわる林述斎。後述）が、中国で散佚し日本だけに存在する書を集めた「校刊佚存叢書五集」を、同じく「頗る淵博にして考拠あり」と高く評価している。詩集でも奥州高子村の在村学者「熊坂邦と其子熊坂秀」らの「南遊稲載録、戊亥遊嚢」や「西川湖の蓬高詩集」などを「みな斐然として観るべき所あり」と高く評価する。

そのうえで第四、寛斎『全唐詩逸』全三冊を入手して「日本の文学、因より海外他邦の並ぶべき所に非るなり」と評価したのである。

いずれにせよ『全唐詩逸』の渡清は、中国にとって高く評価すべき文化事件だったにちがいない。その評価の内容は、のちの日本への里帰りもふくめ、東アジア漢字文化圏に普遍しうるものであった。なお、ここでの文化事件とは、「あらたな文化世界を拓かせる契機となるような出会いや文物授受の出来事」をさすこととする。

本稿は、『全唐詩逸』の刊行～渡清までをめぐるさまざまな動きのなかに、在村文人、在村文化が大きくかかわっていることに注目し、在村文化の一展開としての東アジア文化交流、その実態を一つあきらかにするものである（奥州在村学者の熊坂父子は別考）。

〈2〉『全唐詩逸』の略年表、諸本一覧、著者・校者一覧、および二人の校者たち

はじめに、『全唐詩逸』刊行～渡清の過程の「略年表」（略）、清国版もふくめ五種の版本の状況、および各巻頭にみえる著者名・校者名の表記を整理しておきたい。

『全唐詩逸』諸本一覧

一、一七八八天明八年　稿本『全唐詩逸』。版木は京都大火で焼失。

序　天明八年戊申十月　淡海竺常（大典）／

所在　未詳

二、一八〇四文化元年　京都版『全唐詩逸』少数試し刷り。一本が長崎海商から清国へ。

序（前出）天明八年戊申十月　淡海竺常（大典）／

所在　清国。四日市宿・東海道・箕輪などもか。

三、一八〇四文化元年八月　江戸版『全唐詩逸』京都から送られた版木の江戸版か

序（前出）天明八年戊申十月淡海竺常（大典）／

序　文化元年八月　述齋林衡撰／所在　早大図書館。

四、一八二三道光三年　清国復刻版『全唐詩逸』不知足齋叢書。

序（前出）天明八年戊申十月淡海竺常（大典）／

跋　道光三年癸未立夏後十日　翁廣平海琛。清国。

五、一八二八文政十一年　江戸再復刻版（知不足齋叢書『全唐詩逸』里帰りによる復刻）[1]。

序（前出）天明八年戊申十月　淡海竺常（大典）／

序（前出）文化元年八月　述齋林衡撰

跋（前出）道光三年癸未　翁廣平海琛／

跋　文政十一年　菊池五山／

校訂者の表記をみよう（清国復刻版・江戸再復刻版ともおなじ）。「全唐詩逸　巻上　日本上毛河世寧纂輯　男三亥校」・「巻中　日本上毛河世寧纂輯　池桐孫　校」・「巻下　日本上毛河世寧纂輯　下田衡　校」となっている。

「巻上　男三亥」は寛斎の嫡子（名は三亥（みつい）、字は孔陽、通称は小左衛門、号は米庵。まもなく書家「米庵」として名をなす。ここでは「米庵」三亥と記す）。「巻中　池桐孫」は高弟の一人「菊池五山」。このころ事情あって上方～伊勢などに流寓していた。「巻下　下田衡」は上州箕輪村の在村文人である。

この「下田衡（号漆園）」について揖斐高は、「上州の寛斎門下下田漆園の手で上梓されようとしたが、これも果さなかった。刊行が実現したのは文化元年のこと…」[2]とする。おそらく最初の天明八年序（大典）による刊行計画で版費を下田漆園が負担したが、京都大火で版木を焼失して頓挫し、「果たさなかった」とされるのであろう。その文化元年刊行にいたるまでの過程は、半世紀後の江戸復刻版『全唐詩逸』菊池五山「跋」に詳述される。寛斎の子「米庵」三亥が出版にこぎつけるまでの経過（そのあと長崎から渡清を実現させるまでの経過は別稿）である。

それによると、「米庵」三亥が京都遊学の途中に「五瀬」

に長逗留中の菊池五山を訪ね、筆写本をつくって長崎で清国側に渡そうという計画を語った。これにたいし五山は、「謄写亦労あり、之を刊せんに若かず」と提案し、「乃ち同社に謀り資を醵して梓に入」れて「米庵」三亥に京で刊行を実現させた、というのである。　そこでは下田衡にはふれていないが、「巻中　池桐孫　校」・「巻下　下田衡　校」と同じ表記法で刻されていることからみて、一般にいわれるさきの「下田漆園の手で上梓…、…果さなかった」にくわえて、文化元年の刊行でも五山と並んで「漆園」下田衡も「版費を負担した校者」として表記された、とすべきであろう（後述）。

「下田衡」は上州箕輪村の在村文人、菊池五山が版費拠出を謀った「同社」は、伊勢四日市宿を中心にした地域で、五山の指導をうける漢詩在村結社（後述および別稿）と思われる。ともに、在村文化活動の一環として版費負担の校者となり、『全唐詩逸』出版～渡清にふかくかかわったことになろう。ここではこれを「版費校者」と仮称し、『全唐詩逸』の出版から渡清にいたる過程を、在村文化における東アジア文化交流の一実態として提示する。

しかし「版費校者」であることは、さきのような傍証史料が存在してはじめてわかる。さきの校者表記法だけでは、当然ながら「版費校者」か否かは明示されない。ここで、ほかの諸本の校者表記法をみておきたい。なお、これら書誌学的な考察は筆者ははじめてであり、必要な諸データも探索の途中である。次節は、ひろく教示を乞うための仮説提起にとどまる。

〈2〉諸本の校者の表記法

「校」の字は、木材を交差させた垣根、知識の授受の交差する建物や行為の意で、知識を交差させて「くらべる・考え合わせる」から校正・校合・校閲の意となり、敬って「高閲」とも記す（広辞苑）。いずれも編著者と別の校者（とよぶことにする）が、原文と版下を比べ考え合わせながら文字を正す意となる。近世の諸本では、さきの『全唐詩逸』のように、巻頭に編著者名のつぎの行に並べて記されるのが一般形式であろう。ここではこれを「巻頭校者」とよぶことにする。一見しただけでは、真の意味での校訂者か、『全唐詩逸』の池桐孫・下田衡のような版費校者かは、区別できない。

はたして『全唐詩逸』のような版費校者が一般的に一定度存在したのか否か、存在するとすればどういう形式で記されたのか、から考えねばなるまい。諸本の記載形式をさぐると、「大窪至佛」の詩集の場合、**付表**のような三つのタイプがあることに気づく。

まずタイプ「A」。一般とおなじ「巻頭校者」が、全巻を通して同一人名で記される。しかし佐羽淡齋は、「中央文人のパトロン的存在」として「山本北山・大窪詩仏・菊池五山

らと交わりを持った」[3]として知られる人物。『全唐詩逸』の版費校者とおなじく一般形式で記されるが、実質は「パトロン的存在」すなわち「版費校者」であろう。

つぎにタイプ「C」。一般とおなじ巻頭校者一人だが、巻毎に異なる人名が記される。発行元にちかい江戸人のほかに、「秋田・加賀・秋田・三河」など遠隔地がみえるのが特徴であろう。こうした「遠隔地校者」の存在は何を意味するのか。そのころの郵便事情もふくめ、編著者と校者と現実にどのようなかかわりかたをしたのか。刊行目的だけでいえば、編著者の居住地にちかい方が便利であろうという今の考えだけでは判断できまい。

何か近世文人の暗黙当然の了解事項があったのか。たとえば、遠隔地にもかかわらず、月日をかけ郵便を介し、しかるべき人に実質校訂を依頼するのが常識であったのか。多くは親友か弟子筋らしいから、遠隔地の校者が多いほど権威をしめすというような暗黙の了解でもあったのか。または遠隔地のものに名目上の「高閲」いわば名誉校者となってもらうことが、文人交際の儀礼上の暗黙ルールだったのか。

あるいはこれら遠隔地校者は、後述の市河寛斎編『日本詩記』のように、版費負担者の募集がおこなわれ、これに応じた地方弟子筋の文人が、『全唐詩逸』の「菊池五山・下田衡」と同じように実質的な版費校者となっていた、とも仮説（第一）できよう。

のこるタイプ「B」は、他例は少ないがきわめて特徴的である。まず巻頭に、通常とおなじく校者が記される。ところが巻末には、「覆校」と記された別の校者があらわれる。巻頭校者と巻末校者、二箇所校者の形式である。巻頭校者は、二人並べて下中央に「校」と記す。しかも一人目、巻頭第一校者は全巻同一の「秋田 岡部英菊厓」、二人目の巻頭第二校者は、地名を肩書にした別人名がつづく。地名は「加賀・伊勢・甲斐・紀伊・加賀・越後・越中・長門」など、第一校者と遠く離れた全国各地に散らばる。

ここでの第一校者と第二校者は、それぞれにどういう役割をもつのか。遠隔地のもの同士どのようなかかわり方で「校」をしたのか。また巻末校者（覆校者というべきか）とはどうかかわるのか。巻末の「覆校」と巻頭の「校」とどう区別していたのか。巻末校者はすべて編著者身近の「男・姪・門人」であるが、このこととどうかかわるのか。

あるいはこのタイプ「B」は、「男・姪・門人」ら「覆校」の巻末校者が実際の校訂作業をおこない、巻頭第一校者は、さきの「高閲」のような一種「名誉校者」、巻頭第二校者は実質的な「版費校者」であった、とも仮説（第二）できる（写本一覧くらいはしていたか）。

「B」「C」について二つの仮説（第一・第二）が正しいとすれば、『全唐詩逸』のように一般表記だけでは区別できない版費校者が、これら「A」「B」「C」タイプの表記形式にかくれていることになる。まだ資料データ作成途中ではあるが、「校」の表記の一般形式のなかに、「版費校者」が一定度存在していたと仮説し、実態にそくした仮称を整理しておく。①はもっとも一般的な校者、②は別考とし、ここでは③のみをとりあげる。

《「□□校」の意味　―「校者」の類型―　》
（「　」内はここでの仮称）

①文字通りの意味で実際に校訂をおこなうもの
　＝「校訂者」（実質校訂者）

②一通り校訂はするが、おもに出版事務など協力した者
　＝「出版校者」

③一通り目を通すが、おもに出版費を援助した者
　＝「版費校者」

つぎに「版費校者」と思われるものの実態を、個別に見ていこう。

Ⅱ．『全唐詩逸』の「校者」とその意味
―版費校者をめぐって―

〈1〉『全唐詩逸』巻下の校者「下田衡」

「下田衡」は号「漆園」。さきのように、淡海竺常（大典）天明八年序の『全唐詩逸』で版費を提供していたが版木が京都大火で焼けて頓挫し、「下田漆園の手で上梓されようとしたが、これも果さなかった」とされる人。

地元では、たとえば篠木弘明『上毛の漢詩人』（平成九年）は、在村漢詩人の一人にかぞえる。「市河寛齋が、…『全唐詩逸』を編さん…、この刊行入用に苦しんだとき、漆園がそれを負担して出版させた」とする。「醸造を業とし、名は衡、知広、字は公権、通称連蔵、欽亭のち小波、漆園…。青翠園は別号…」とも記す。

在村文人としての実態をみよう。まず戦国期、箕輪下田氏は上杉方の箕輪衆の一員であった（『関東幕注文』(4)）。武田氏の上州進出に対抗し、長野氏とともに箕輪城にこもって落城で最期をとげた（『箕輪軍記』(5)）。その子が土着して近世、徳川大名の入部で名主・地代官に任命され、開発や地域支配にあたりつつ大地主にもなった（『群馬県史』）。

近世初期から在村文人としても活動していたであろう。高崎とその近在の在村文人録ともいうべき鈴木恭齋『藤蔭叢話』（文政八年序）には、「漆園、姓は下田、名は衡、字は公権、群馬箕輪の人、酒井侯に仕え進みて白川邑宰と為る、博聞宏識家に書万巻を蔵す、公事に暇無きに猶且つ詩・書を以って自ら娯む、数年の諸作筐に満つ」（原漢文）とされる。

関東在村文人の人名録『関東諸家人名録　初編』（年不詳。

加賀文庫）では、「聞人 詩 漆園 名衡 字公権 箕輪 下田漆園連蔵」、子の下田米二も「詩 青齋 名 字萬年 仝所」と記される。「詩（漢詩）」の表記は人名録でも希少で、漢詩文層ともいうべき地域の文化最上層をなす。父子ともに地域頂点的な在村文人として活動する家であった。

いずれにせよ『全唐詩逸』巻下「下田衡 校」の下田氏は、旧地侍系の地代官として地域支配の頂点にあり、醸造業などもあわせ箕輪郷きっての富財をたくわえる地主豪農商であった。文化面では、「聞人 詩」[6]の頂点的な在村文人であり、「博聞宏識」で「家に書万巻を蔵す」蔵書家、漢詩に傾倒して「数年の諸作箧に満つ」ような漢詩人でもあった。

この下田衡が、地域でどのような文人交流をしていたか、上州渋川の在村漢学者「吉田芝渓」の「与下田公權書」（書簡。年未詳、「芝渓…五十有二」享和三年ヵ。原漢文。『芝渓文集』渋川市立図書館）に読みとることができる

芝渓の書簡は、まず儒学の研究経過を述べる。「論語」「孟子」の「徳」の意味について「諸家未だ解せず、解の有るは亦まさに未だし…、…その余の諸註、すこぶる牽強する處あるを覚ゆ」と、一般の儒者を批判する。自分が研究中の「大学」について「致知は格物に在り、信然哉、信然哉」と、高く評価する。「孔子家語」について、「最上至極の書、未だ詳解あらず、…ようやく得る所の有るを覚ゆ」[7]とも記す。漆園は、芝渓とこれら儒学研究を論じあえる文人であった。

芝渓は「衣食に奔走し、書を資するに皆乏」しい独学（独塾。「独塾記」）の者と自称し、そしていう。独学という点では二人とも同じだが、「衣食に奔走…、書…皆乏」しい自分とは違い、あなた下田衡は「多財にして多書、春秋の暇日もみな富む、独塾（独学）は日にわたり代をへて、その得る所は必ず多し」、独学の成果は大きいだろう、という。

そして自分は、頭白となった今は、儒学研究の成果を「只…子弟に示さんと欲するのみ」を内心に期しているが、そのことを、「素より僕を知る」あなた漆園だけには包み隠さずに伝える、というのである。芝渓は渋川芝中に小さな私塾（芝渓塾。門人帳などは未詳）をもち少数の門弟名も伝わるが、漆園とは儒学を論じ、生き方を語りあえるような、師弟関係にちかい知己の間柄だったであろう。

こうした地域きっての文人ぶりは、元禄期につくられたという数寄屋造の書院と庭園「青翠園」が県重要文化財として保存され、今につたえられている。『全唐詩逸』の版費校者となるだけの経済的力量と文化的力量を十分もっていた、といえよう。

この「漆園」下田衡が、一八〇〇寛政十二年夏から秋にか

けて、「米庵」三亥（一一才）と会っている。市河三陽『市河米庵伝』[8]が引用する寛斎の弟子宛書簡（おなじく関東大震災で焼失か）に「児三亥臨池ノ伎日ニ益上進シテ殆ド昔日ノ阿蒙ニアラズ。杪夏暑ヲ伊香保山中ニ避ケ今ニ至リテ猶箕輪高崎ノ間ニアリ。此僕ノ一樂ナリ」とみえる。子煩悩の寛斎が嫡子「三亥」の書道の向上を手ばなしで自慢しつつ、上州伊香保の避暑地から箕輪・高崎などの門人宅をめぐっていることを報じたもの。箕輪は下田衡の居村。書家として独立修行中、『全唐詩逸』の出版渡清をひそかに意に決していたであろう「米庵」三亥は、さきの五瀬の五山にたいすると同じように、『全唐詩逸』出版・渡清について相談したはずである。下田衡も、よろこんで協力を約したにちがいない。

それゆえ四年後に「巻下　下田衡　校」として巻頭に刻され、その名も清国へ渡ることになるのである。

〈2〉『全唐詩逸』巻中の校者「池桐孫」と「五瀬…同社」

ついで「巻中　池桐孫　校」。「池桐孫」は菊池五山のこと。寛斎の高弟の一人で、名は桐孫、字は無弦、通称は左太夫、号は五山。讃岐高松藩の藩儒菊池室山の子だという。はじめ柴野栗山に師事し、江戸では市河寛斎らの江湖詩社に参加して活動したが、何らかの事情で数年間江戸をはなれ上方から伊勢辺に流寓した。さきのようにその伊勢で、『全唐詩逸』の出版と版費にふかくかかわることになる。その経過を、のち『全唐詩逸』再復刻版（一八二八文政十一年）の「菊池五山跋」に詳述する。おおよそつぎの通り。

寛斎没後の文政十一年（一八二八）正月のこと、天瀑林公（述斎）が寛斎の子「市河米庵」を呼んでいわく、「此れ知不足齋叢書第三十套にて去秋舶來せるものなるが内に、吾子（米庵）先人（寛斎）輯する所の全唐詩逸を収めたり。末に翁廣平の跋ありて　頗る推重の意を寓せり」と。二〇数年前に若き「三亥」米庵が長崎海商に手渡した『全唐詩逸』が、中国で復刻されて里帰りしたのである。日本文人界にとっても、これは一大文化事件だったであろう。

下賜された知不足齋叢書版『全唐詩逸』をもって米庵は、すぐ五山を訪ねて報告した。「此書さきに吾兄（五山）の校讐を経て、その顛末を竭せるもの吾兄に如くものなければ…」だったからである。つづけていう「先人（寛斎）これを輯して以て彼（清国）の亡を補ふ。今彼に刻せらるゝを得て、實に素望に副へり…」、中国の逸詩を補うという父寛斎の望みが叶えられた、あとは「吾将に家に帰りて香を焚き以て先人の霊に告げん…」と。市河寛斎は、『全唐詩逸』渡清後の清国での反響の大きさを知らないまま、すでに没していたのである。

ふかい感慨をもった「米庵」三亥が、まっさきに五山に報告したのは当然であった。五山は二十数年前の五瀬逗留中のこと、『全唐詩逸』出版の顛末を思い起こすことになる。

五山はいう。「今を距る二十有六年享和癸亥（一八〇三享和三）の冬…、余（五山）五瀬（いせ）に客たりしとき、米庵諷然として至り、自ら西征（長崎行）の意」をしめした。すでに以前から米庵は父寛斎に、「身瓊浦（長崎）に遊び、清客に夤縁して速に彼方に傳へん」といって、『全唐詩逸』を中国へ伝えるための長崎行を訴えていた。ところが当の寛斎は「瓊浦は遠く鯨波を渉る、単身千里能く虞なきを保んや、…詩逸の伝はるは只應に時を待つべし」というだけで、長崎行を二度と考えることを禁じた、という（子煩悩の寛斎が体の弱いことを案じた結果であろう。実際にのち長崎へ着いてすぐ寝込んでいる。別稿）。

「米庵」三亥は一七七九安永八年生まれ。二十歳もすぎ、書家として独立しつつあった若い米庵は、逆に「父母の子を憂ふるもとより至らざるなし。子の父の志を成すも豈に勉めざるべけんや」とひそかに意を決し、父寛斎の戒めにそむく形で夜かくれて筆写しつつ、ついに写本をつくりおえた。

そのころようやく父寛斎は、三亥の遊学を許すようになった。弟子宛書簡追伸に「多年心願にて上京仕、夫より大阪播州備前等へも罷越度旨にて相願、去る十九日当地発足仕り、來春迄も罷在修行等仕度由」と記す。それでもまだ「病身者故案思も仕候得共…」[9]などと心配している。西は播州備前までで、長崎行など願えば即座に厳禁したであろう。しかし当の「米庵」三亥は、これ絶好のチャンスと考え、ひそかに『全唐詩逸』筆写本を嚢中に、東海道をのぼる途中、さきのように四日市宿に菊池五山を訪れたのである。

五山跋はつづけていう、「米庵」三亥が「遂に潜に一本を謄写して今実に帯來れり。願はくは子（菊池五山）の館を假りて更に一副本を写さん」と申し出た…、五山は（先述のように）さらに一歩ふみこんだ提案をした、…「余（五山）曰く、謄写亦労あり、之を刊せんに若かずと。乃ち同社に謀り資を醵して梓に入」るべきだ、というのである。「五瀬に客たりし」五山が出版費を謀って拠出させるだけの「同社」が存在したことは重要である。これをひとまず四日市を中心にした「在村詩社」としておこう。

そのころの五山は、流落」していた。師の市川寛斎も「既に自造之罪を以て京摂之間に流落す」（「自造之罪」は不明とされる）と記す。五瀬は「イセ」つまり「伊勢国」、逗留先は東海道の四日市宿。『東海道人物志』があげる文人数では「掛川63・吉田35・見附31・三島31・四日市30・嶋田30」で、四日市は上位に入る。活動は「扇面・雅人・漢学・詩・書・和哥・画・茶道・狂哥・医学・俳諧・碁・謡・将棋・大鼓・笛・乱舞・狂言・佛学・印章・易学…」など多岐にわたる。逗留中の五山とその門人もみえる。

のち『五山堂詩話』（巻四 二十一）でも「北勢最も著るし

き者、蔵書は則ち高果亭吉、好事は則ち伊蓬亭…」と記す。「高果亭」は高尾氏、「伊蓬亭」は伊達氏。ともに四日市宿の頂点的な文人で、そのもとにさきの三十人程が中心になり、周辺地域もひろくふくめて五瀬文人が活動していたのである。『東海道人物志』の記述を抜粋しよう。

「扇面　雅人　名氏伴　字子奐　号蓬亭（ママ）　伊達太右衛門」・「茶道　名吉　字士常　号果亭（ママ）　高尾九兵衛」・「漢学　詩　書　名桐孫　字無弦　号五山　池五山」……。

また四日市の文人録ともいうべき「改正泗水郷友録」（以下『泗水録』）には、冒頭「詩文」の項に「五山門人」として、「永田謙蔵・鈴木要蔵・中川磯右エ門・堰儀市・身延新四郎」五名がみえる。伊達氏は「皆川門人　伊達太左エ門」と記される。(10)

また伊達氏は、南宋の地方官田園詩人「范石湖」（范成大一一二六～九三）の詩集『田園雑興』を、自家の「成趣園蔵板」（癸亥。一八〇三享和三ヵ）で出版している。末尾の「蓬亭伊達伴識」には、「家刻し以って自翫す」と記す。伊達氏は『人物志』で「扇面　雅人」とのみ記されが、漢詩文にもっともつよく傾倒し、富も多く注いでいたらしい。

かれらはその後も、寛斎門下で五山と入れ替わりのようにやってくる柏木如亭を長逗留させ、『泗水録』に「吉田太多市・森寺源之助・宇佐美修吉・篠原十藏」らが「如亭門人」と記載される。おなじく寛斎門下の大窪至佛の詩集『西遊詩草』（文化六年）の刊行には、「四日市　村田月渚」（未詳）が「上州桐生　佐羽淡斎」とともに校者に名をつらねる。ともに近世地方小都市の経済的文化的力量の高さをしめす。

逗留する「五瀬…客」五山が、画期的な『全唐詩逸』をみてすぐ「同社に謀り資を醵して梓に入」るべきことを説いて実現させたのも、のち米庵が『全唐詩逸』出版～渡清の「顛末を竭せるもの吾兄に如くもの」なしといったのも、こうした四日市宿の経済的文化的力量の高さが基盤（経済基盤は略）になっていた。

いずれにせよ『全唐詩逸』の出版と渡清には、上州箕輪村の在村文人「下田漆園」および四日市宿の菊池五山とその「同社」が、大きな役割をはたしていたのである。

以上、『全唐詩逸』の「巻中　池桐孫　校」・「巻下　下田衡校」の意味とその背景をみてきた。ここでの校者は、文字通りの校訂者というよりも、出版資金を提供して「校」と記された一種名誉校者、さきの「③ 版費校者」になる。出版費が不足がちの画期的あるいは網羅的な大著が出版される陰には、これら多くの版費校者がいた、とみるべきであろう。

つぎに、寛斎が実際に「版費校者」をつのり、その「名簿控」をのこしていたという『日本詩紀』をみよう。そこにも多くの在村文人がみえる。

Ⅲ. 市河寛斎『日本詩紀』の校者
―版費校者における在村文人―

〈1〉『日本詩紀』十二巻本の校者

市河寛斎の大編著に、古代以来の日本漢詩を集成した『日本詩紀』がある。はじめ全十二巻六冊で天明六年（一七八六）に刊行したが、のち増訂で全五十二巻にふくれあがった。佐野正巳『詞華集　日本漢詩　3』解題は、「木活字版が誤謬多きをもって改訂に努め、本書底本に採用した浄書本を完成…、一部を板にしたのみで終った」とする。寛斎の著作・原稿類は死後、火災による焼失を恐れた子の米庵の手で、昌平黌に寄託された。『日本詩紀』も、版本十二巻六冊および増訂稿本五十二巻が、内閣文庫に保存される。

まず『日本詩紀』十二巻六冊本（内閣文庫［204-324］）をみよう。表紙右上に「番外書冊」の小貼札と「浅草文庫」の印がみえる。「詩文」など分類ラベルにかくされた書き込みもあるらしい。各巻頭には「彙編」と「同校」がならんで刻される。以下のとおり。

「日本詩紀　巻之一　上毛　河世寧子静　彙編（以下同じ。略）武蔵　山昌永子明　同校／日本詩紀　巻之二　伊勢　巌城煥章蔵　同校／日本詩紀　巻之三　浪華　新山質休文　同校／日本詩紀　巻之四　五瀬　平井敬君敬　同校／日本詩紀　巻之五　武蔵　夏包嘉成美　同校／日本詩紀　巻之六　武蔵　島範洪卿　同校／日本詩紀　巻之七　仙台　源知周仲旋　同校／「日本詩紀　巻之八　中山（ママ）井眞子眞　同校／「日本詩紀　巻之九　武蔵　林興季雄　同校／「日本詩紀　巻之十　武蔵　柏謙益夫　同校／日本詩紀　巻之十一　武蔵　入江寧子道　同校／「日本詩紀　巻之十二　信濃　釋鴻潮元儀　同校」。

ここでいう「同校」はどういう意味か。彙編の「彙」が「同」で「彙校」の意味なのか。「彙校」とふつうの「校」とどう使い分けているのか。同じ意味なのか。ここでは一般の校訂者を意味するものとしておく（教示を乞う）。

巻之一の校者「武蔵山昌永子明」は山村氏。昌永は名、子明は字。寛斎の妹が土浦藩山村昌茂に嫁して生んだ子「山村才助」で寛斎の甥。このころ寛斎の若い門人だったという。のち大槻玄沢門下で蘭学を学び、『訂正増訳　采覧異言』など地理書研究に長じ、著作には海外事情の訳書が多い（『国書人名辞典』。以下同じ）。寛斎の甥として『日本詩紀』の校者になったのであろう。「男」とともに、「姪（甥）」が実質校訂者になる例は多い。

巻之二「伊勢　巌城煥章蔵」。岩城宗廉（号は巌城）だとすれば、香道と本草（画集）に著がみえる。巻之三「浪華　新山質休文」（生没年未詳）、通称は律蔵、号は訥齋。林述斎・平沢旭山に学び、著作に『蝦夷風土記』ほかがある。父が奥州生まれで、寛斎の詩集『寛齋摘草』序には「仙台　社弟　新

山質」としてみえる。寛斎に師事する一人であろう。

巻之四「五瀬　平井敬　君敬」。「五瀬（いせ）」はさきとおなじく「伊勢」、平井君敬（宝暦十二年一七六二～文政三年一八二〇）、名は業、字は可大・君敬、通称は直蔵、号は澹所。四日市の山寄り福村（現、菰野町）の農の生まれ。関松窓・平沢旭山らに学び、寛斎とも交際した。享和二年（一八〇二）に伊勢桑名藩に招かれ、桑名の藩校進脩館の開設に尽力、のち藩校の総督になった、という。農出身の在村文人から藩儒にのぼった、出世型の漢学者というべき人。巻之五「武蔵　夏包嘉成美」は、江戸札差の商家文人「夏目成美」で、俳諧では一茶の保護者としても著名。巻之六「武蔵　島範洪卿」は小島洪卿（延享三年一七四六～文化六年一八〇九）。名は範、字は洪卿、江戸蔵前の札差「小島屋」で、書画珍籍を多く集め「万巻楼」と号したともいう。編著に『詩学韻海』『兎園韻冊』などがみえる。

巻之七「仙臺　源知周仲旋」は藤塚知周。塩竈神社祠官で代々国学系の神官文人「鹽亭」藤塚知明の子。巻之八「中山井眞子眞」は未詳。巻之九「武蔵　林興季雄」は「夏目成美」とおなじ札差文人らしい。巻之十「武蔵　柏謙益夫」は「柏木如亭」。名は謙、字は益夫、号は如亭、幕府小普請の出という。寛斎の有力門弟の一人として校者になったのであろう。さきの「男」「姪」とおなじく「門人」の校訂者の例は多い。巻之十一「武蔵入江寧子道」は徂徠学の入江北海の子。寛斎にも師事したのであろう。

巻之十二「信濃釋鴻潮元儀」は真宗僧「雲室」。信州水内郡飯山の光達寺に生れ、安永年間に江戸へ出て宇佐美灊水に学び、林家にも出入した。のち江戸芝の光明寺住職となる。山水画と漢詩にすぐれ、柏木如亭らと「小不朽社」という詩画の結社をなした、という。みずからの学歴を回想した『雲室随筆』で、「予…は小左衛門（市河寛斎のこと）日本詩紀を活板に致れける手伝に参居ける」と記す。『日本詩紀』初版十二巻本の刊行や増訂版の作成を手伝っていたらしい。

このように、『日本詩紀』十二巻本の校者は七名が江戸住。富商もいるが、遠方もふくめ門人ら専業の漢学者が多い。さきの仮説分類では「① 実際に校訂をおこなった者」、実質校訂者とみてよかろう。

〈2〉『日本詩紀』五十二巻稿本の現状と「版費手控」

ついで寛斎は、この十二巻本を大幅に増訂した。『日本詩紀』五十二巻増訂本（内閣文庫［特120-12］）である。冒頭の一部のみが版本で、これに自筆稿本の「木石居」用紙をつなぎあわせた形でのこる。内閣文庫目録は「編者市河寛斎、写本市河寛斎　50巻外集・別集・作者系譜各1巻。旧蔵者昌平坂学問所　市河寛斎手跋本、巻1、2（12丁まで）は版本を取り合せる」とする。版本の取合せを確かめると、「凡例」

第一～三丁、「総目」は第十七丁のみ、巻之一は第一～第十二丁すべて版本。巻之二は第一～十二丁が版本。第十三丁からは自筆稿本。版本の取合わせは全二十八丁となる。

巻の冒頭はすべて「上毛河世寧　彙編」と記され、校者の記入はない。版本だった部分も、はじめから校者なしか、貼り合わせで切り取られたか、校者はみえない。大部分は寛斎の自筆らしいが、一部の異筆は、さきの雲室など弟子が清書に協力したものであろう。

最末尾原稿外の後扉には、寛斎の草稿類を昌平黌に寄託したときの米庵の添書がのこる。「日本詩紀、総目一巻、首集四巻、甲集二巻、乙集六巻、丙集三十五巻、丁集十六巻。外集一巻。通計五十二巻。先君竭一生精力所纂。但巻帙浩瀚未能遽上策。家存亦不保無祝融之虞。因以稿本寄藏之昌平文庫。文政四年辛巳冬十月男三亥謹記」と記す。

この五十二巻増訂本について寛斎は、出版のため出版費負担の協力者を募ったらしい。市河三陽『市河寛斎先生』は、「この書の上木に際し門人知友の寄附を乞ひて刻費に充てんと欲しその募疏の文ありたる如きも今見るべからず唯先生自筆の紙片次の如きものを存するのみ」として、紙片内容（仮称「版費手控」。のち関東大震災で焼失という）を全文引用する。そこには、地方の国名・地名肩書をもつものがかなりの数でみえる。寛斎一門に縁のふかい地方文人が、版費負担者になっているらしい。以下のとおり(11)。

「日本詩紀　五十三巻　丁数　計八百三十六丁／首巻　廿一丁　寛齋／第一巻　十一丁　池桐孫／第二巻　十三丁　島徽／第三巻　十三丁　大窪行／第四巻　二十二丁　三亥／第五巻　十一丁　松則武／第六巻　十七丁　井文房／第七巻　十五丁　宮澤達／第八巻　十八丁／／第九巻　十五丁　下総戸須　丹敬／第十巻　十二丁　島筠／第十一巻　十三丁　白石　啓字子簡　稱清助　号松洲／第十二巻　十八丁／第十三巻　十八丁／第十四巻　十六丁　北越大井平　保坂甚左衛門／第十五巻　十八丁／第十六巻　十六丁　北越大井平　保坂俊助／第十七巻　廿三丁　（上州）佐波淡齋／第十八巻　十四丁　信州中野　高魯／第十九巻　廿一丁／第二十巻　廿丁　信州上田　土屋光潔　儀兵衛／第廿一巻　九丁　池桐孫／第廿二巻　十四丁　善光寺　柄澤照方／第廿三巻　十六丁　下仁田／第十四巻　十三丁　池桐孫／第廿五巻　十五丁　越後水原　小田島小青／第廿六巻　十五丁　三浦九折／第廿七巻　十七丁／第廿八巻　十六丁　三浦／第廿九巻　十九丁／第三十巻　十七丁／第卅一巻　十四丁　須田景勤／第卅二巻　十二丁　島筠／第卅三巻　十七丁／第卅四巻　十六丁　大江自芳／第卅五巻　廿二丁／第卅六巻　十丁　木壽／第卅七巻　十一丁　信州岩村田　森泉尚平　名疎筠字　畑雨／第卅八巻　廿一丁／第卅九巻　十五丁／第四十巻　十四丁　信州岩村田　渡邊民次郎　名碧字狩峯／第四十一巻　廿四丁　佐

羽淡齋／第四十二巻 十四丁 越後新潟 佐野和七／第四十三巻 十五丁 同燕 神保佐（五脱ヵ）右衛門／第四十四巻 十丁 大窪行／第四十五巻 九丁 信州小諸 池田寛藏／第四十六巻 廿三丁 同 上田 柏皚／第四十七巻 十二丁 信州野沢 並木七左衛門 名粹 字純夫／第四十八巻 十九丁 同 並木普右衛門 名政字寛叔／第四十九巻 十七丁 同 並木甚右衛門 名良字求夫／第五十巻 十七丁 同 金子周平 名成字岩平／外集一巻 十三丁／別集一巻 十五丁」（傍点部は後述）。

まず一～七巻までは、地名肩書がない。寛斎にもっとも身近な嫡子や高弟らで、多くは江戸の人。九巻目からは、とびとびに地方の地名・国名肩書をもつものがふえる。

しかし実際の出版はさきの冒頭二十八丁分のみであるから、ここにみえる地名・人名は、版費予定者である。しかも全巻ではなく総数五二巻中三八巻にとどまる。このような大きな編著のばあい、全巻そろって版費提供者でうまることは少なかったのであろう。実際に出版された冒頭二十八丁も、自筆稿本に切り貼りされていて原形はわからない。したがって、これら版費予定者がどういう形式で「校者」に記されるはずだったかも、不明である。

地名・国名肩書をつけた地方出身者の人数を整理すると、「信州　11、越後　7、上州　3、下総　1」となる。これら各地域の各人の実態をみたいが、紙数の制約上ここでは、信州から「第十八巻 十四丁 信州中野 高魯」と「第四十七巻 信州野沢 並木七左衛門」だけとりあげよう。

〈3〉『日本詩紀』五十二巻稿本「版費予定者」の実態
―信州中野・野沢の在村文人たち―

まず「第十八巻　十四丁　信州中野　高魯」。「高魯」は高梨氏で戦国期の旧地侍層。上杉方について領地開発もすすめたが、武田氏侵攻で越後に落ち、武田滅亡後に帰郷するなど盛衰はげしかった。関ヶ原戦のあと地侍層家臣も直系は上杉氏とともに奥州へ移り、傍系の多くが土着した。他地域の旧地侍層とおなじく、初期在村文化の担い手にもなったであろう。さらに一世紀以上をへた子孫の一人が、「信州中野　高魯」であった。

遺稿集が亀田鵬齋序『紅葉遺詩』文政九年刊（国会図書館）でのこり、編者「信州松齋山田静」が小伝を記す。「高魯」高梨氏、号は聖誕。「聖誕、名魯。信濃人。高梨氏。自ら書室に扁して紅葉庵と曰う」と記す。「嘗て詩学を柏如翁に問う」ており、「其の詩は斬新流麗」と評された。生き方は「権豪に諂らわず、寒士を軽んぜず」、多くの文人と差別なく交際した。私塾もひらいていたが、「教授以て薄饌を給し家に擔石無くも、毫も意に介さず」という生活ぶり。「身を草廬の中に居すとも、名は百里の外に騁せる」ので、地域では「皆聖誕を推して信中作家の翹楚」とみていた。詩作は数百

首にのぼるが、手元に「今存する所僅々若干首」、これを「裒繕して木に上げ、以て同志に貽る」べくこの遺稿集を編んだ、などと記す。

老齢で疾寝する鵬齋から送られた序を、隷書体で代書しなおした「信濃　梅堂山岸蘭腸」は、高魯と鵬齋との出会いについて、「文化己巳（六年）之歳鵬齋先生北游して信中に抵す、中野の詩人高聖誕、詩を懐にして贄謁す」と記す。北越への道すがら中野に泊した鵬齋に、詩と礼物をもっていきなり会いにいったらしい。これを書した梅堂山岸蘭腸も、文政十年『信上当時諸家人名録』に「書・徘徊・業医、梅堂、自芳、蘭腸、信中野、山岸魯庵（歟）」として、「書・徘徊・業医、名示備、字柳崖、号程々菴、同中野、山岸清左衛門（歟）」と並んでみえる。ともに中野村の在村医だったらしい。

これら中野村の文人には、寛斎門人とされる「木舗（ママ）百年」はじめ、寛斎一門と縁深いものが多い。校訂者になったり、版費を提供したり、訪れるたびに長逗留させたりしている。『如亭山人遺藁』（文政三跋）には、巻末校者として「巻一　門人木壽（ママ）百年　校字」・「巻二　門人高魯聖誕　校字」がみえる（ほか「巻三　門人楠正榦楨夫」）。文化四丁卯序『采風集』にも「巻一　信濃　木壽百年／伊賀　藤堂良道子基　同校」としてみえる。(12)

「米庵」三亥が寛政八年、一七歳で上信遊歴に出されて訪れたときも、ちょうど柏木如亭（永日）が中野門人宅に長逗留中で、「毛信遊草」に「（八月）十一日中野に永日（如亭の字）を訪ふ。…また長蘭腸（ママ）を訪ふ。…夜高聖誕・鎭濫（ママ）觴來訪す。みな永日の門人なり。…十三日諸人と共に木百年を蓮村に訪ふ」など、交流をふかめているようすがみえる。(13)

柏木如亭は、中野の詩社「晩晴吟社」を指導したが、その中心の一人に「山田松齋」がいた。山田家は代々の地域頂点にたつ地主文人。山田正子『信濃文人の旅』によれば、旧地侍系開発地主で質地地主、文化末年持高「十二ヵ村七五二石」という。(14)　文化六年に亀田鵬齋が上信越の遊歴で訪れたとき、初対面で松齋の「琴」まで奏でる文人ぶりに感嘆したという。松齋は以後長年にわたり師弟の礼をとりつづけ、鵬齋著作の版費を援助した。

文政五年には、鵬齋『黍稷稲粱辨』第二版「再刻」を刊行した。文政六年には、鵬齋『国字攷』を、みずからの跋「文政癸未冬十月　門人　信濃松齋山静　謹識」をつけて自家蔵版「寶善堂蔵」で刊行した。文政九年には鵬齋『国字攷』を補訂する自著『国字攷補遺』も刊行、おなじく鵬齋『黍稷稲粱辨』を補訂する自著『経典穀名考』は、二度にわたり刊行している。初版は上下二巻、第二版は第一～第三巻で頼山陽文政十一年序。ともに明徐光啓『農政全書』穀之部を併載する。内容は文字・語彙の研究で実践的な農書ではないが、旅日記

には、農具や作柄につよい関心をもつ記述をのこす。実践型文人の面もつよかったらしい。

このように、『日本詩紀』の版費予定者「第十八巻　信州中野　高魯」とその周辺では、中央文人の版費負担もふくめ、さまざまな文化活動が、日常的にはばひろく展開していた。

こうした在村における中央文人の版費負担の動きは、「第四十一巻　廿四丁佐羽淡齋」（別稿）などもふくめ、在村文化の重要な一要素として、改めて位置づけねばなるまい。

いずれにせよ、「高魯」高梨氏は、遺稿集の「序」・「書」・「伝」に、江戸文人と信州文人それぞれトップ級をそろえるような頂点的な在村文人であり、『日本詩記』版費予定者にふさわしい存在だったといえよう(15)。

ついで「第四十七巻　十二丁　信州野沢　並木七左衛門　名粋字純夫」をみよう。並木七左衛門（天明五年一七八五～嘉永五年一八五二）、号は万梅・梅の舎、和歌・国学で活動した。天保飢饉で多くの金穀を放出し、岩村田藩から褒賞されたという村役人～豪農商層。歌学を香川景樹、国学を前田夏蔭にまなび、夫妻で香川門下だったという。馬術、謡曲もたしなみ、亀田鵬斎はじめ江戸文人ともひろく交際した。(16) 鵬斎北遊（文化六年）のときにも長逗留させた、という。

野沢は、岩村田とともに佐久平の中心拠点の一つ。近世前期から在村文化のさかんな地で、さきの信州中野の山田松齋にとっても親しい地であった。文政六年、鵬齋七十二歳賀宴に参加するべく孫を連れて江戸に出た松齋は、さきの鵬齋『国字攷』の版費や版下の手配などもすませたその帰り道、碓氷峠から佐久郡へ遠回りして「芝池殿」・「七左衛門殿」などを訪れている。(17) 版費校者になるような地方有力の在村文人たちは、日常的にもたがいにつよくむすばれながら活動していたのである。

『日本詩紀』の版費予定者は、これら相互につながりながら展開する在村文化の諸活動の一環として、弟子筋の多い上州・越後・信州などに集中してあらわれたことになる。

おわりに

このように、寛斎一門との師弟関係がつよい地域に版費負担者の肩書地名が集中するわけだが、その前提には、さきの信州中野・野沢とおなじく、ひろく江戸中央文人をひきつけるだけのさかんな文化活動と、それをささえる活発な商品生産～商品流通、経済活動があった。「信州11」の他の地名や「越後7」・「上州3」などは別稿とするが、どの地域でも、富裕で漢詩文の素養も高いものが、版費予定者に登場している。

『全唐詩逸』の版費校者、上州箕輪村「下田衡」や五瀬の「池桐孫」とその「同社」のような存在は、在村文化の諸活動の一環としても、一定度ひろく存在しうるもの、と結論す

ることができる。

紙数の都合上、そのほか多くの版費校者の実態を省略した上、本論となるべき『全唐詩逸』出版から長崎渡清にいたる経過は、全部省かざるをえなかった。「後述」とした多くの部分も「別稿」に改めた。

本稿は、主題のいわば序説にとどまったが、『全唐詩逸』出版・渡清という東アジアにおける一文化事件に、「版費校者」として在村文人～在村文化がふかくかかわっていたことを、その実態もふくめ最小限あきらかにすることができた。

付　本稿は、二〇〇三年度学習院女子大学日本文化学科の後期科目「日本文化交流史Ⅱ〈東アジア〉」の最後3回分、第五講の前半部を詳述したものである。第一～四講もふくめ授業の中身に素直かつ鋭敏に反応した学生（アジア留学生もふくむ）諸嬢に謝意を表する。（二〇〇三・一二・一八）

注

(1) 江戸版『全唐詩逸』の蔵版元について、活字版『日本詩話叢書』（大正九年）の解題が（　）付きで「文化紀元春三月発兌江湖社蔵版」と記すが、内閣文庫ほかの文化元年版本にみえない。早大所蔵本に見返しの蔵版の欄が空白の一本がある。ここに「江湖社蔵版」と入れた別版があるのかもしれない。教示を乞いたい。文政版は早大所蔵本に「飜雕知不足齋本　小山林堂蔵版」とある。小山林堂は米庵の書塾の呼称。米庵の蔵版ということになろう。

(2) 『日本古典文学大辞典』揖斐高

(3) 揖斐高前掲書

(4) 『上杉家文書』

(5) 『群書類従』

(6) 『関東諸家人名録』の記す「聞人」は、各種の人名録にしきりにあらわれる。「文人」の語は使っていない。同じ音「ぶんじん」で、今で言う文人を「聞人」と記したのではないか（教示を乞う）。

(7) 「孔子家語」は偽書とされるが、在村独学者として原典にかえって朱子学・古学などを批判する研究をすすめている芝渓は重視した。研究成果は稿本『弁学遼東豕』として遺される（拙稿「吉田芝渓の開荒活動と朱子学批判の思想」一九九二早実研究紀要26号、のち拙著『近世の地域と在村文化』吉川弘文館二〇〇一）

(8) 市河三陽『市河米庵伝』「東洋文化」一七一～一八五昭和一四～一五年所収

(9) 注8におなじ。

(10) 『四日市市史』所収

(11) 市河三陽『市河寛斎先生』所収

(12) 『詩集日本漢詩』七・八巻

(13) 市河三陽前掲書所引。「鎮濫觴」は鎮目氏か。

(14) 龍鳳書房二〇〇一。

(15) 「高魯」高梨氏については異同がある。『長野県歴史人名辞典』などは「畔上聖誕　中野の人、名は魯、通称逸作…」とする。「畔上」氏は。上杉氏に臣従した地侍「高梨氏」の陪臣の家だという（角川『家系事典』）。なぜ異同が生じたか、事実はどうなのか。教示を乞う。

(16) 『南佐久郡誌』

(17) 山田正子、(14)前掲書

（本学非常勤講師）

付表

表題	著者	年代	巻	著	巻頭校者	巻末校者	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	1809文化６序・1809文化７序	初編 巻之一	常陸 詩佛大窪行天民 著	上毛 淡齋佐羽芳蘭卿 校	ナシ	A
詩聖堂詩集	大窪詩佛	～1809文化改(1834天保５求版)	～巻之十	常陸 詩佛大窪行天民 著	上毛 淡齋佐羽芳蘭卿 校	ナシ	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	1827文政10序・1828文政11序	二編 巻之一	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／江戸 辻元崧崧菴 ／校	男 謙 覆校	B
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之二	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／加賀 韓弼西皐 ／校	男 謙 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之三	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／伊勢 邨田明水莊 ／校	男 謙 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之四	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／加賀 野邨圓平空翠／校	姪 碓井歡 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之五	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／甲斐 広瀬謙保菴 ／校	男 謙 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之六	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／江戸 伊藤孝誼半村／校	姪 碓井歡 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之七	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／紀伊 垣内定溪琴 ／校	門人 田耕 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之八	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／加賀 白崎暐翠屏 ／校	姪 碓井歡 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之九	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／甲斐 大森欽快菴 ／校	男 謙 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之十	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／越後 室高詩痩 ／校	姪 碓井歡 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之十一	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／越後 渡邊原松春 ／校	男 謙 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	二編 巻之十二	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／越中 長崎健浩齋 ／校	門人 田耕 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	1831天保２発允	二編 巻之十三	秋田 大窪行詩佛 著	秋田 岡部英菊厓／長門 八木彝橘里 ／校	男 謙 覆校	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	1835・38天保６・８序	三編 巻之一	秋田 詩佛大窪行天民 著	江戸 廉齋木村弘伯毅 校	ナシ	C
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	三編 巻之二	秋田 詩佛大窪行天民 著	男 謙自牧 校	ナシ	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	三編 巻之三	秋田 詩佛大窪行天民 著	江戸 姪 碓井歡青堂 校	ナシ	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	三編 巻之四	秋田 詩佛大窪行天民 著	江戸 静一三上恒九如 校	ナシ	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	三編 巻之五	秋田 詩佛大窪行天民 著	江戸 錦園天野韶九成 校	ナシ	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	三編 巻之六	秋田 詩佛大窪行天民 著	秋田 竹香石黒友子古 校	ナシ	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	三編 巻之七	秋田 詩佛大窪行天民 著	江戸 晴譚嶽田澄秋月 校	ナシ	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	三編 巻之八	秋田 詩佛大窪行天民 著	加賀 空翠野邨圓平 校	ナシ	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	｜	三編 巻之九	秋田 詩佛大窪行天民 著	秋田 蘭泉宇野毅公實 校	ナシ	
詩聖堂詩集	大窪詩佛	1838天保９発允	三編 巻之十	秋田 詩佛大窪行天民 著	三河 啄峰釋成實 校	ナシ	

表は、諸原本・『詞華集日本漢詩』・『詩集日本漢詩』ほかから筆者作成中の「校者データベース」から抜粋した。編著者・校者など同一データも、煩雑だがそのまま記した。